

縄文から息づく日本の地域福祉の源流

- 岡本太郎が発見した「日本的なもの」から辿る -

The Origin of Community Development in Japan to breathe from Jomon - Tracing from "the Japanese-style something" which Taro Okamoto discovered-

かのう ひで とし
和 秀 俊

〈要 旨〉

従来の日本の地域福祉の源流を探る研究では、欧米の近代化の理論に基づく市民によるコミュニティ形成を目的とする実践や方法を扱うことが多いため、それらの実践や方法が日本においてより多くの地域でうまく進んでいるとは言い難い。そこで本研究では、日本独自の文化や生活を形成する日本人の根源的な意識や営みに焦点を当て、先行研究を整理することによって、日本人が本来持つ「日本的なもの」から始まる地域福祉の源流を検討した。

その結果は、以下の通りである。岡本太郎が縄文土器から縄文人が厳しくも神聖な自然との矛盾に向き合い、そこから生み出される現実的に自然と共生する精神性と営みが日本人の根源的な「日本的なもの」であることを発見した。この縄文人の世界観や意識は、国家主導による日本の伝統的な共同体とともに土着的な精神性の解体がはかられたが、日本人は自然と共にある風景に安心し、自然と共生することによって自然のままに生きる自己を確立しながら、折り合いをつけ多様性を認め合うという精神が脈々と続いており、これこそが日本人の根源的な意識である「日本的なもの」であり、日本の地域福祉の源流であると思われる。したがって、日本の地域福祉は、自然と共にある風景の空間をデザインし、縄文から息づき多くの日本人が持つ根源的な「日本的なもの」の衝動を生かして、地域住民が自然に地域の矛盾と向き合い折り合いをつけ、多様性を認め合う共同体を構築していく実践と方法が必要である。

〈キーワード〉

縄文, 地域福祉の源流, 自然, 折り合い, 多様性

I. 従来の日本の地域福祉の源流に対する違和感

今まで日本の地域福祉の源流は、主にイギリスで19世紀に取り組まれた慈善組織化運動やセツルメント、コミュニティワーク、この影響を受けたアメリカでのケースワークやコミュニティオーガニゼーションなどを参考に、明治時代における宗教家や篤志家などによる慈善事業やセツルメント、社会事業が語られることが多く、日本の原初的な地域福祉の源流である「ゆい(結)」や「もやい(催合)」,「講(頼母子講・無尽講, 富士講, 伊勢講, 善光寺講など)」などの伝統的な共同体の相互扶助については、言葉の説明はあっても具体的に論じられることはほとんどない。

このことは、次のことなどが影響していると思われる。まず欧米から学んで近代化してきた日本は、ゲマインシャフト(地縁・血縁で結ばれた共同体)からゲゼルシャフト(利害関係や目的意識で作られた社会)への移行が歴史の発展であるという欧米の共同体の概念や捉え方を受け入れ(テンニース 1887 = 杉之原 1957), 戦後の日本において伝統的な共同体社会から近代的な市民社会へと転換されていく中、大塚久雄が『共同体の基礎理論』(1955 年)において、これからの日本の市民社会に向けて自然や土地に隷属している従来型の共同体を否定していることが挙げられる。また、「コミュニティ—生活の場における人間性の回復—」(国民審議会 1969)や「コミュニティ形成と社会福祉」(中央社会福祉審議会 1971)などにおいて、期待概念としてのコミュニティを構築する必要性がイデオロギー的動員のように国家主導で盛んに言われた(園田 1969)。そして、岡村重夫が『地域福祉論』(1974 年)で、イギリスの慈善事業やセツルメント、コミュニティケア、アメリカのコミュニティオーガニゼーションなど欧米のソーシャルワークに注目して地域福祉について論じ、福武直が『日本社会の構造』(1981 年)において、すべての人の福祉のために新しいコミュニティを形成することを促し、奥田道大が『都市コミュニティの理論』(1983 年)において、期待概念として市民によるコミュニティ形成を目指す「コミュニティ・モデル」を提唱したことなどである。このように、日本の地域福祉は、高度経済成長などを通じた近代化や民主化によって従来型の相互扶助による共同体が解体したため、欧米型の自律した個人である市民がコミュニティを構築することを求められたのである。

しかし、日本は東アジア特有のモンスーン型の風土であるため(和辻 1935), そもそも日本人は暴風雨や洪水、豪雪などの厳しい自然と共生し折り合いをつけて、人と助け合わなければ生きていけないため、結やもやいなどの相互扶助による地域社会を形成してきた。一方欧米人は、自然に対抗し制圧するために自律した強い個人として生きる必要があり、自然がもたらす課題を解決し克服していくことでコミュニティを構築してきたのである。したがって、日本の地域社会と欧米のコミュニティとは成立された経緯や目的なども異なるため、日本において市民による欧米型のコミュニティを期待概念として求めても難しいと思われる。このように、日本の地域福祉論で前提となる地域社会が、日本の伝統的な共同体である村などの地域社会ではなく、主に欧米のコミュニティ論から語られることに違和感を覚える。

1970年代初頭からコミュニティの構築や地域福祉の必要性、その方法としてのコミュニティワークやコミュニティオーガニゼーション、コミュニティソーシャルワークの重要性が声高に叫ばれているにもかかわらず、約50年たった現在においても、先駆的な地域など一部の地域ではある程度成功しているものの、より多くの地域でうまく進めることができているとは言い難い。その理由として、日本の地域福祉が目指すべき地域社会やその方法として、市民による欧米のコミュニティや、それを形成する方法であるコミュニティワークなどは、より多くの日本人の意識や感覚に合っていない可能性がある。それでは、日本の地域福祉にとって、どのような地域社会やそれを構築する方法が、より多くの日本人にとって適切なものであろうか。それを探究するためには、日本人が本来持つ意識や営みなどが反映された地域福祉の源流を検討し、それを生かすことが必要であると思われる。

しかし、従来の日本の地域福祉の源流を探る研究では、先に述べた通り、欧米の近代化の理論に基づく市民によるコミュニティ形成を目的とする実践や方法を扱うことが多い。そこで本研究では、日本独自の文化や生活を形成する日本人の根源的な意識や営みに焦点を当て、先行研究を整理することによって、日本人が本来持つ「日本的なもの」から始まる地域福祉の源流を検討したい。

Ⅱ. 岡本太郎が発見した「日本的なもの」

日本人が本来持つ根源的な「日本的なもの」とは、一体何であろうか。芸術家の岡本太郎が、フランスから帰国し「日本的なもの」を感じるために京都や奈良を訪れたところ、古代の中国や朝鮮からの大陸文化ばかりで、「日本的なもの」を感じる事ができず絶望したのだという。そのような中、岡本が「なんだ、これは!」と発見したのが、縄文土器の火焰型土器から溢れ出す日本人オリジナルのもの、「日本的なもの」であった。著書『日本の伝統』の中で、岡本は縄文土器にふれ、「からだじゅうがひっかきまわされるような気がしました。やがてなんともいえない快感が血管の中をかけめぐり、モリモリ力があふれ、吹きおこるのを覚えたのです。たんに日本、そして民族にたいしてだけでなく、もっと根源的な、人間にたいする感動と信頼感、したしみさえひしひしと感じとる思いでした」と述べている(岡本 1956, 80-81)。そして、この縄文土器という縄文式原始芸術から湧き出る根源的な「日本的なもの」を、以下の2つの視点で考察している。

まず、狩猟期に生きた縄文人が獲物の気配を察知し的確にその位置を確かめる鋭敏で三次元的な空間感覚があるからこそ、激しく鋭く縦横に奔放に躍動するアシンメトリー(不均衡)な隆線紋を的確、精緻に縄文土器で表現することができたのではないかと推察している。

また、狩猟生活は自然の偶然性に左右されるが、すべてに霊が宿り、それらに支配されている(アニミズム)と考えられていたため、儀式や祭などの呪術が狩猟において重要であった。そして狩猟において敵である獲物がないと生きていけないため、縄文人にとって獲物は彼らの全存在を委ねる神聖な存在である。しかし、この神聖な存在である獲物を食べないと生きることができな

いという悲劇的な複合精神(コンプレックス)や矛盾(アンビバレンス)に対して、宗教的な儀式が厳粛に営まれる。縄文土器は、このような「強烈な矛盾に引きさかれ、それに堪え、克服する人間の強靱な表情」を豊に誇り、縄文土器の紋様には「超自然的な世界とのはげしい、現実的な交渉のうえに成り」立ち、「自然と人間との、生命のバランスは神秘的であり、超自然的に動的であり」、「まさにそのような四次元との対話」という自然と共に生きる具体的、現実的、生活的な呪術の世界が秘められているという(岡本 1956, 98-99)。

岡本は、この「はげしく強い神秘的美観の根底にある精神、そのドラマの本質」にこそ、日本人が根源的にもつ「日本的なもの」を捉えることができるとしている(岡本 1956, 96)。すなわち、縄文人が厳しくも神聖な自然との矛盾に向き合い、そこから生み出される現実的に自然と共生する精神性と営みや、「モリモリした生命力、その英知」が、岡本が縄文土器から発見した「日本的なもの」であるといえよう。

Ⅲ. 日本独自の文化である縄文時代

岡本太郎によって縄文土器から湧き出る根源的な「日本的なもの」が見出され、縄文人の精神性や営みから、日本人が本来持つ「日本的なもの」について検討することができた。しかし、縄文土器や縄文人が持つ精神性や営みが、果たして日本のオリジナリティ、「日本的なもの」と言えるかどうかは、考古学や歴史学などの専門領域から検討する必要があると思われる。

考古学や歴史学の数多くの研究者が論じているように、獲物を追って遊動的生活であった旧石器時代が終わりを告げた1万5千年前から、ヨーロッパや中国などの大陸は農耕を基盤とする新石器時代へと移行したのに対して、日本は狩猟、漁労、採集を中心とする定住生活である縄文時代へと展開した。このような農耕に頼らず定住生活を送った縄文時代というのは、世界の中でも日本のみの文化と言われている(小林 2018, 瀬川 2017, 関 2019, 山田 2019 ほか)。したがって、縄文時代に作られた縄文土器や縄文人が持つ精神性や営みは、日本の根源であり「日本的なもの」と言っても差し支えないと思われる。そこで、小林が『縄文文化が日本人の未来を拓く』(2018)で論じた学説を用いて、縄文人の世界観や意識を整理したい。

この日本独自の文化である縄文時代は、「自然の秩序を保ちながら、自然の恵みをそのまま利用する」という自然との共存共生関係があったからこそ、今から1万5千年前から3千年前までの1万2千年もの間続いたと言われている。新石器時代の農耕を基盤とした大陸のムラにとって、自然そのままのハラ(自然的空間)は征服しノラ(田や畑)に開墾する対象であった。一方、縄文人は定住するために、イエや倉庫、共同作業や祭りの場、ゴミ捨て場や共同墓地などからなる人工的空間のムラを作り、その外側の自然的空間としてのハラが保有する自然資源を食料や道具を作る材料に利用する関係によって生活が営まれていたという。つまり「縄文ムラは、自然のままのハラと

もにあった」のである(小林 2018)。

縄文人にとって、生活の拠点であるムラは、生まれ育ち死を迎える場所であり、身も心も馴染む近景であった。そして、ムラの外であるハラは中景、遠くのヤマは遠景、ソラは背景というように、縄文人はムラ、ハラ、ヤマ、ソラという遠近法の空間認識がなされていたという。また、ヤマは単なる遠景ではなく異空間との境界となり、アノ世であるソラへの入り口であると考えられていた(小林 2018)。特に、富士山や三輪山のような左右対称の円錐形である神奈備(カンナビ)山は、霊性を備えた特別なものと捉えられていた。したがって、「神奈備型のヤマを擁する風景は他をもって替え難い個性によって、縄文人の心性に迫り、それに馴れ親しむうちに、ムラおよびその一帯に个性的で確かな場所性を生みだす」。そのため、縄文人はムラに戻って来た時に、馴れ親しんだヤマの姿に懐かしさを実感することでほっと安堵し癒されながら、改めてオラがムラを意識して自らのアイデンティティを確認できたのではないかという(小林 2018)。

また、縄文人は、自分たちの環境の中に象徴的な山と太陽の運行を取り込むために、ストーンサークルや巨木柱列などの記念物(モニュメント)を造ったと言われている。例えば、山梨県都留市の牛石遺跡のストーンサークルは代表的なもので、そこから見える三ツ峠山の3つの真ん中のピークに春分と秋分の日には太陽が沈んでいく。日本最大級の縄文集落遺跡である青森市の三内丸山遺跡は、6本柱の延長線上の山の稜線に冬至の日には太陽が沈み、夏至の日には太陽が昇り、両端の柱を対角線に結んだ延長線上の山々は、春分と秋分の日に出、日の入りの時に、山頂が放射線状に光り輝くダイヤモンドフラッシュが見える。このように、縄文人は春分、秋分、夏至、冬至を熟知し季節を知ることによって自然の恵みの変化を見るときともに、ダイヤモンドフラッシュなどの自然の演出を縄文人たちの環境世界の中に取り込んでいたという。また、記念物は祭りや儀礼、祈りにかかわる場であり、「ケ」(日常の場)であるムラに対して、「ハレ」の世界、つまり聖なる空間であったと言われている。そして、先ほどの二至二分(夏至冬至、春分秋分)の原理と神奈備型のヤマとの関係が、記念物の場の聖性にとって極めて重要な役割を演じていたと論じられている(小林 2018)。

以上みてきたように、ムラとハラにおける自然との共存共生を通して創造されたヤマとソラとも一体となった縄文の風景や記念物によって、縄文人の世界観や意識が反映されていることがわかった。しかし、このような世界観や意識は、縄文時代の終焉とともに消滅してしまったのであろうか。

Ⅳ. 縄文人の意識や営みが息づく神社・鎮守の森

先述してきた日本独自の文化である縄文時代の精神性や営みは、我われ日本人の意識や地域社会に、神社という形で今なお色濃く残っている。代表的な地域として、縄文人が神奈備山である富士山と大山を日常的に目の当たりとして、自らの風景づくりの重要な要素として取り入れること

ができた相模国(神奈川県の一部)がある。ここは縄文中期の大遺跡が多いことから、縄文人の精神文化や世界観を創造することができる地域であったと思われる。その中でも、富士山と大山で二至二分の日の出、日の入りが重なる地域が、神奈川県寒川町の岡田遺跡で、その近くに寒川神社がある。ここから真西に富士山があり、春分と秋分にはその頂上に日の入りを望むことができ、夏至には大山への日没を拝むことができるのである。寒川神社は、富士山と大山という典型的な神奈備山を風景に取り込み、二至二分の日の入りの方位に合致する場所に位置しており、相模国の一の宮ともなっている。そして、寒川神社が富士山と大山の二至二分の方位の中心であるだけでなく、それらの線上に複数の神社があり、複数の神社が共通の風景の中に位置づくこの地域では、寒川神社がある場所が縄文人の精神文化や世界観を創造した風景の中心的な意味を持っていたと言えるであろう。

このように、縄文人の精神性を弥生時代、古墳時代を経て古代へと継承するために神社は成立したのであるが、大陸伝来の仏教の侵入に対抗して、今まで継承してきた縄文の伝統的な精神性を守るために、神社を立てたのではないかと考えられている。神社は、これまで縄文人による伝統的な精神世界が定着し維持され、山を仰ぎ二至二分とも同調する特別な土地、聖なる場所に建てられた。その場は人の生活と精霊の世界との結界を意味し、神社はそのシンボル(標識)となったのである。神社によって改めて縄文の伝統的な思想の主体性を確立し、仏教の風潮に飲み込まれずに、自然との共存共生するのと同様に、仏教の共存を可能にしたと言われている(小林2018)。

また、神社を囲む森林は「鎮守の森」とも言われ、「その土地の守護神をまつた神社を取り囲む木立ち、または木立ちに囲まれた社域全体」(『日本国語大辞典』)と定義されている。御神体は本殿や拝殿などの注連縄の張られた社であり、それを囲むものが鎮守の森とされている。神道の源流である古神道では、縄文人から脈々と引き継がれている神籬(ひもろぎ)・磐座(いわくら)信仰があり、森林や森林に覆われた土地、山・巨石や海や河川など自然そのものが信仰の対象になっているため、神社境内では御神体として霊石や神木を崇められている例も多い。神社は、このような常世(とこよ)と現世(うつしよ)の端境と考えられた神籬や磐座のある場所に建立された。奈良県の三輪山を信仰する大神神社のように、山そのものが御神体とされる神社は各地に見られる。また森林やその丘を御神体として、本殿や拝殿さえ存在しない神社もある。このように、鎮守の森は、縄文時代から続く自然信仰を現代にも伝える役割を担っていると言える。

以上のように、日本独自の文化である縄文時代の精神的な世界観は、神社や鎮守の森を通して現代の日本人も共有することができる可能性がある。したがって、我われ現代人は神社、鎮守の森に行く、またその周辺の地域で生活することによって、縄文人の自然と共存共生する自然信仰を感じることができると思われる。

V. 日本の伝統的共同体の基層に残る精神

内山節が『共同体の基礎理論』(2010)で述べているように、かつての「日本の共同体は自然と人間の共同体として、生の世界と死の世界を統合した共同体として、さらに自然信仰、神仏信仰と一体化された共同体として形成され」、「進歩よりも永遠の循環を大事にする精神があり、合理的な理解よりも非合理的な諒解に納得する精神」があり、「人々は共同体とともに生きる個人であり、共同体にこそ自分たちの生きる『小宇宙』があると感じていた」という(内山 2010)。このように、日本の伝統的な共同体での生活は、縄文人の精神性と営みが脈々と受け継がれているのである。

この日本の伝統的な共同体は、明治時代に入ると、神仏分離令や国家神道などによって村と村人の国家への統合と天皇制との結びつきをはかられ、壊されていった。しかし、「自然と人間が結び、人間が共有世界をもって生きていた精神が、共同体の基層に存在している」ため、「おそらく縄文時代やさらに昔の時代から、この精神は存在したであろうし、明治以降の歴史のなかでもこの精神が直ちに消え去ったわけでもないだろう。壊されながらも、その精神は村の社会の古層に残されている」と述べている。それでは、日本の伝統的共同体の基層に残る精神とは何であろうか。以下、内山の『共同体の基礎理論』で論じられた学説から、整理してみたい。

まずは、自然と人間の関係の矛盾に折り合いをつける精神である。村は自然と人間の里であるため、動物は村に暮らす仲間であるが害獣でもあり、猟の対象でも尊敬の対象でも神の使いでもあるという矛盾がある。この矛盾を当然のこととして受け入れ、人間の知性では捉えられない中で人間も生きているという諒解が村人の精神であるという。これは、厳しくも神聖な自然との矛盾に向き合い、そこから生み出される現実的に自然と共生するという岡本太郎が捉えた縄文人の精神性と重なる。また、東アジアのモンスーン地帯である日本では、時々大雨が降り洪水も引き起こすが、雨量が多いからこそ水田もつくることができ作物もよく育つため、この矛盾を受け入れながら生きていくしかない。「こういう風土に生きた人々は、合理的な精神をもつことより、矛盾とつき合い、矛盾と折り合いをつける能力を高めた」という。

次に、自然と人間との自治を行い、個を確立するための自然への信仰である。村人は、祭りを通して自然世界と人間の世界が連続し一体的に展開していることを再認識し、自然に神の世界を見出し様々な神に祈りを捧げることによって自然を自分たちの世界に取り込む。そして様々な年中行事で神と成仏し自然に帰った祖霊を家に呼び祀ることによって神の領域にし、自然を呼び込み自然の世界そのものである神に祈りを捧げることによって、自然と人間の世界を再構成し続けるのである。このように、「日本の共同体は、自然への信仰によって自然を取り込み、自然への思いをたえず再生産することによって、自然と人間の自治を行ってきた」という。これは、ムラとハラにおける自然との共存共生を通して創造されたヤマとソラとも一体となった縄文の風景や記念物による縄文人の世界観に通じる精神といえよう。それによって、自然と一体となって、「私」を捨て自然(ジネン)のままに生きる自己になることで個を確立しようとしたのである。「個を確立した人間が自然と一体化し自

然の一員となっていく」のである。

そして、共同体の多層的精神である。村人たちは、仲間としての動物と害獣としての動物、狩猟の対象としての動物と尊敬の対象としての動物、神の使いとしての動物などそのすべてに真理があり、真理はある磁場の中に成立しているため磁場が異なれば真理も異なるという発想から、多層的な真理の折り合いのつけ方を探した。また、川が氾濫し農地に濁流が入ることは禍であるが、そのことによって新しい土が入り土壌改良されるのは恵みであるなど、禍としての自然と恵みとしての自然ははっきりと分けられるものではなく、切り取られた断面が異なれば真理も異なると捉え、共同体に暮らすことに真理を見出しながら、多層的精神を育んだという。この多層的精神は、村人たちの多様性を認め合う精神ともいえるであろう。

以上みてきたように、日本の伝統的共同体の基層に残る精神とは、自然と一体となって自然のままに生きる自己を確立し、自然と共生するために折り合いをつけ多様性を認め合うという縄文時代から脈々と続く精神であり、日本人の根源的な「日本的なもの」ということができるかもしれない。

VI. 縄文から息づく日本の地域福祉の源流

岡本太郎が、縄文土器から縄文人が厳しくも神聖な自然との矛盾に向き合い、そこから生み出される現実的に自然と共生する精神性と営みが日本人の根源的な「日本的なもの」であることを発見した。この縄文人の世界観や意識は、古代、中世、近世、近代、現代へと進む中で、仏教の侵入や中央集権国家に向けて国家主導による日本の伝統的な共同体とともに土着的な精神性の解体がはかられたが、日本人は自然と共にある風景に安心し、自然と共生することによって自然のままに生きる自己を確立しながら、折り合いをつけ多様性を認め合うという精神が縄文時代から脈々と続いている。これこそが、日本人の根源的な意識である「日本的なもの」であり、日本の地域福祉の源流なのではないだろうか。

したがって、日本の地域福祉は、欧米の近代化の理論に基づいた市民によるコミュニティ形成を目的とする実践や方法ではなく、自然と共にある風景の空間をデザインし、縄文から息づく多くの日本人が持つ根源的な「日本的なもの」の衝動を生かして、地域住民が自然に(オノヅカラ)地域の矛盾と向き合い折り合いをつけ、多様性を認め合う共同体を構築していく実践と方法が必要である。それによって、より多くの地域住民が、安心でき魅力ある持続可能な共同体づくりに、自ら参加するようになると思われる。

<引用文献>

小林達雄：縄文文化が日本人の未来を拓く，徳間書店，2018

岡本太郎：日本の伝統，光文社，1956

内山節：共同体の基礎理論，農文協，2010

<参考文献>

福武直：日本社会の構造，東京大学出版会，1981

広井良典：人口減少社会のデザイン，東洋経済新報社，2019

川村匡由：地域福祉源流の真実と防災福祉コミュニティ，大学教育出版，2016

大塚久雄：共同体の基礎理論，岩波書店，1955

岡村重夫：地域福祉論，光生館，1974

奥田道大：都市コミュニティの理論，東京大学出版会，1983

瀬川拓郎：縄文の思想，講談社，2017

関裕二：「縄文」の新常識を知れば日本の謎が解ける，PHP，2019

園田恭一：地域社会論，日本評論社，1969

テンニース：ゲマインシャフトとゲゼルシャフト，杉之原寿一訳，岩波文庫，1957

上田正昭編著：探求「鎮守の森」社叢学への招待，平凡社，2004

上田篤編著：鎮守の森，鹿島出版会，2007

戸矢学：縄文の神，河出書房新社，2016

山田康弘：縄文時代の歴史，講談社，2019

和辻哲郎：風土—人間学的考察，岩波書店，1935